OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本的宗教心における基層信仰 : 確証的因子分析による抽出
Author(s)	川端, 亮
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 57-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八七年二月〕
『年報人間科学』第八号五七頁―七六頁

日本的宗教心における基層信仰

――確証的因子分析による抽出――

川端亮

日本的宗教心における基層信仰
—確証的因子分析による抽出—

はじめに

日本における宗教の構造は重層的であるといわれる。この重層的という意味は、二つ以上の異質な宗教や宗教的信仰が同時に存在し、かつ、全体としては一つの体系をなしていながらも、それぞれの要素がその異質性を保持している状態を指すのである。それは、個人の宗教的行動において、一方では神棚を拝みながら、他方では仏壇にはお仏飯を供えることも含まれるし、またある婦人が、個人的にはキリスト教を信仰しながらもその家の宗教である仏教に従い、墓参りを行なうことも、ある宗教の教えに神道的要素と仏教的要素と自然崇拝的要素が混じっていることも含まれる。

このような異質な宗教や宗教的信仰の併存は、外来宗教と接触する時にはどの社会においても見られる。しかし、たとえばキリスト教社会が次第に宗教において合理化され、文化的に統合されていったのに対して、日本では単一宗教として統合されず、様々な宗教や信仰が異質なままに保持されてきたのである。したがって、重層的構造が日本の宗教体系の大きな特徴の一つと言えるであろう。

ゆえに日本の宗教を考える時には、重層的構造を手掛かりに考察していくことが有効であると思われる。その重層的構造を捉えるために本論では、組織的宗教、民間信仰、基層信仰の三層構造を分析枠組として用い、ある神社に参拝する人々の宗教意識の調査から、特にこの重層的構造を規定していると考えられる基層信仰の特徴を明らかにしてみたい。

一、日本の宗教における重層的構造

日本の宗教は組織的宗教、民間信仰、基層信仰からなる三層構造をしていると考えられる。

まず第一の組織的宗教には、キリスト教、仏教はもとより、天理教、大本教などのいわゆる新宗教も含まれ、大規模に組織化された宗教をいう。その特徴を主として実際に果たしている社会的機能の面から考えると、

①教祖が存在する。
②教祖やその後継者によって創唱された教義・教宣が存在する。
③教義・教宣を広める伝道者がおり、彼らが組織的な布教活動を展

開している。

④布教活動の結果、信徒の結成する教団ができる。この信徒が組織結集する範囲は比較的広範囲で、一郡、一県を越え、更に一国内のみならず、国家の領域を越えて広く地球上に信徒を獲得し、数民族を包含する広大な組織に成長する例もある(1)。

⑤教団を組織する信徒の信仰は、根本的には個人の信仰に帰着する問題であろうが、「信仰の担い手としての個人は、同じ共通の信仰を分かちあっているという同心意識をもって共同体としての場を持っている。その場が教団(2)」である。

第二の民間信仰は、このように規定された組織的宗教と対比してみれば、その違いが明確となる。つまり、民間信仰においては、教義を創唱した特定の教祖は存在しない。教義がないため、まとまった宗教的体系を持たないし、個人の自覚的な宗教意識によって獲得された信仰ではない。その信仰は、日常生活を送っている数多くの民衆のあいだで、俗信や年中行事、通過儀礼などを基に培われ、育てられてきたもので、伝道者がもたらすものではない。したがって基本的には、信徒の組織される範囲は狭く、ひとつの村落か部落のごとく、小地域社会内の小規模な生活共同体に限られていることが多い(3)。

第三の基層信仰には、巨石や巨木などの自然崇拝や祖先崇拝、その他山川草木にまで神々が宿り賜うというアニミズム的心性が含まれると考えられる。そしてそれは、歴史を貫いて過去から現在まで、日本人の心の最も奥深いところで無意識的に保持されてきたものであり、それ自体、決して一つの体系的な形とはならない。つまり、基層信仰は、一つの形として取り出すことができない、分析のための概念である。

以上述べてきた組織的宗教、民間信仰、基層信仰の三つは、それぞれ複雑な様相を帯びているのだが、無秩序に併存しているのではなく、全体として一定の構造的秩序を保って存在している。

組織的宗教は、その発生基盤がなんであれ、組織化されるに従って普遍的な救済の思想が生じ、教義のなかに取り込まれていく。それに対して民間信仰における救済は、もし救済と呼べるものがあるとしてもそれは、首尾一貫したひとつの体系ではなく、個別的な現世の苦難をおもに呪術によって克服しようとするものである。民間信仰が個別的な救済に留まる点で、それは二義的なもの、低位なものと見なされる。

しかし、民間信仰の救済は、個別的であるがゆえに直接的であり、即効的で人々に理解されやすく、また人は自分の持つ世界観をほとんど修正することなく信仰に頼ることができる。一方、組織的宗教における救済は、まずその宗教の世界観を受け容れなければならず、またその世界観に基いて日常生活を変えることによって初めて救済が得られるという点で、間接的であり、ありがたさが人々に容易には理解されない。したがって、民間信仰の方が人々の心により深く根付き、より多くの人々に支持されているといえる。実際、組織的宗教である新宗教も、その成長過程においては、民間信仰の要素を数多く取り込み、それを人々に訴えることによって教勢を拡張して

きたのである[4]。

以上のことから、組織的宗教は民間信仰よりも表層にある構造が考えられる。

そして基層信仰は、その名の通り民間信仰よりも更に基層にあるものを想定しており、これが重層的な日本の宗教体系を全体として一つの構造的秩序に統合するのに大きな役割を果たしていると考えられる。その統合の仕方について考えるときには、問題は宗教だけにとどまらず、文化の基層についてまで考察せねばならない。

日本の文化は外来文化の影響に非常に敏感であり、様々な要素をいわば借物のように取り入れてきた。他方、「日本人ほど忠実に古いものを保持する民族も他にはない[5]」という指摘も古くからなされてきた。つまり、日本文化は、外来文化そのものを別とすれば、新しく入ってきた外来文化の影響を受け変化しやすい表層と、変化の速度が緩慢であまり変化しない基層の二つに分けることができよう。この基層のことをたとえば丸山真男は、執拗低音（Basso ostinato）と呼び、決して一つの教義にならないものであるという[6]。つまり執拗低音は、一つの思想の枠組として考えられているのであって、それ自体を表わす思想なり、思想的伝統は形成されなかった。そして「あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互連関性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で――否定を通じてでも――自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸[7]」が、日本においては形成されなかったことが、多くの外来文化を排除せず、次々と取り入れることが可能となった一因であろう。

しかし一方、執拗低音の「断片的な発想力はおどろくべく執拗な持続力を持っていて、外から入ってくる体系的な外来思想を変容させ、いわゆる「日本化」させる契機になる[8]。」

その日本化の方向は常に一定していた。たとえば仏教の教理は、インドにおいては、

・・・生きとし生けるものは、無限に輪廻の過程を繰り返すのであり、・・・釈尊といえども過去の無数の生涯において幾多の善行を積んだので、その果報としてこの世で修業を行ない、仏となることができた。その修業も、凡夫は一生涯の間になしとげることができない。幾多の生涯にわたって修業をつづけなければならない。・・・日本仏教の多くの諸派は、凡夫といえども現世にさとりを開いて覚者となりうるものである（即身成仏）ということを強調する[9]。

また、インドの浄土教は、

現世の世界は汚濁にまみれた穢土であり、とうていわれわれ凡夫はここで仏道を修業することはできないから、来世にはより良き世界である極楽浄土に生れて、そこであみだ仏のもとで仏法を聴聞し修業してついにねはんを得ようと願うのである。ところが、日本の浄土教、ことに真宗によると、極楽浄土に生まれることとねはんを得ることは同一のことがらである（往生即涅槃）[10]。

成仏や涅槃、浄土という仏教にとっては核となる部分すらも変容させられるほど、基層文化の影響は強く、その変容の方向は、「生きるために与えられている環境世界ないし客観的諸条件をそのまま肯

定」し、「諸事象の存する現象世界をそのまま絶対者とみなし、現象をはなれた境地に絶対者を認めようとする立場を拒否する[11]」方向である。この現世に価値を認める現世主義によって、インド仏教は、その現世超越的側面を排除させられ、仏典の中の現世中心的な側面のみが探しだされ、取り入れられて、現世的日本仏教として生まれ変わったのである。そして、現世の現象以外に絶対者を認めない立場が、現世的に変容されたものならば何であっても受容する寛容性を生じさせ、重層的な構造が成り立つのである。

以上のような文化における基層の特徴は、信仰心においても見られる。すなわち基層信仰は、歴史を貫いて脈々と生き続けているが、決してひとつの教義を持った体系ではない。そしてそれは、日本人の心の奥底に沈潜している、それ自体は見えない信仰であって、表層の民間信仰や組織的宗教に断片的に現われるだけである。しかしながら基層信仰は、異質なものが重層している宗教的状況を一つの構造的秩序あるものに統合するのに大きな働きをしている。つまり、第一に表層の組織的宗教や民間信仰を一定の方向に変容させる影響力を持っており、第二にその方向に沿ったものならば何でも許容し、受け容れる性質を持つので、秩序ある重層的構造が成り立つのである。

それではその基層信仰の内容は、一体いかなるものが想定されるのであろうか。そしてそれは、表層の民間信仰をどのような方向に向けてきたのであろうか。この問題について従来の理論的研究とともに、一民間信仰である神道石切教石切神社における宗教意識調査の結果によって明らかにしていこう。

二、神道石切教石切神社の概略

石切神社は、正式名称を石切劔箭神社といい、京都、大阪、奈良の府県境にまたがる生駒山地の西側山腹、東大阪市東石切町に位置する。この生駒山地は古くからの聖地であり、『延喜式神名帳』（九二七年）に記載されている式内社が、四六社・五九座あり、また現在においても宗教法人だけで、大阪側に約二五〇、奈良側に約一五〇に及び、その他にも多数の民間信仰や中小教団が簇生しているため、宗教社会学的興味の尽きない地域である。

その興味は、単なる数の多さだけからくるのではない。生駒山地の宗教施設を訪れる人々の多くは、おもに大阪市内からやってくる大都市の住民であり、彼らを受け入れる宗教施設のほうも人々の様々な欲求に対応できるように、現世利益（グンゼリヤク）を掲げるものから修験系の寺院、朝鮮寺、修養団体や巨木、巨石への自然崇拝まで、種々に分化している。

その中で石切神社は、『デンボ（はれもの、おできのこと）の神様』として有名であり、大阪市内を中心に年間延べ一〇〇万から二〇〇万の人々が、病気一般によく効く神さまとして信仰し、お参りしている。

この石切神社に集まる人々の特徴を挙げてみると、まず第一に実際に病気平癒祈願が多くなされていることである。昭和五七年と五

表1　参拝当日の目的　（複数回答）

目的	人数	比率
病気平癒祈願	53人	23.0%
健康祈願	49	21.3
お礼参り	42	18.3
家内安全祈願	39	17.0
月参り	25	10.9
感謝の気持ちで	16	7.0
七五三で	6	2.7
交通安全祈願	3	1.3
商売繁盛	2	0.9
その他	24	10.4
特になし	7	3.0
無回答	16	7.0

表2　参拝頻度

参拝頻度	人数	比率
はじめて	14人	6.1%
年に1回未満	13	5.7
年に1回	11	4.8
年に数回	27	11.7
月に1回	119	51.8
月に2・3回	10	4.3
週に1回	4	1.7
ほぼ毎日	7	3.0
無回答	25	10.9
合計	230	100.0

表3　初の参拝時

初の参拝時	人数	比率
はじめて	14人	6.1%
今年	6	2.6
去年	12	5.2
2・3年前	8	3.5
4・5年前	13	5.7
6～10年前	48	20.9
11～20年前	40	17.4
21～30年前	30	13.0
31年以上	48	20.9
わからない	2	0.8
無回答	9	3.9
合計	230	100.0

八年に神社の境内で合わせて二三〇人の参拝者に尋ねたところ、当日、病気平癒祈願をした人が五三人、健康祈願をした人が四九人であり、合わせて半数弱にあたる(表1参照)。さらにそれまでに一度でも病気平癒祈願をしたことがあると答えた人は、一五七人で全体の三分の二を占めるのである。一方、それ以外の祈願内容については、再び表1によれば、家内安全が三九人と二割弱を占めるものの、交通安全祈願が三人、商売繁盛が二人と少なく、石切神社の現世利益の機能としては病気に特定されているといえる。

第二の特徴として、信者の多数は定期的に参拝しているということが挙げられる。表2を見れば、毎月一回以上参拝するという人が二三〇人中一四〇人である。また表3によると、定期的に参拝する

ようになってからの年数は、六年以上の人が一六六人と多数を占めているのである[12]。

このように石切神社は、現世利益を標榜する神社であり、実際にそこに集まる人々もご利益を求めて参拝するのではあるが、病気の時や困ったときだけ神頼みにやってくるのではなく、毎月習慣的に参拝する固定信者が中心であると考えられる。したがって、単なる現世利益からだけでは信者の宗教心は説明できないのであり、基層信仰の点から説明できる部分もあるのではないかと考えられる。つまり、基層信仰の要因のうち少なくとも幾つかは、石切神社の信者の宗教心に現われていることが予想されるのである。

三、宗教意識調査の方法

基層信仰にどのような要因が含まれているのか、またその現われ方はどのようになっているのかを調べるために、宗教意識に関する調査を行なった[13]。

この調査は、石切神社の境内で調査員が参拝者に対して質問票を用いて行なった。調査対象は参拝者であるが、これらの参拝者の大部分を神社側は把握し組織化していないため、母集団を確定することは不可能である。したがって、確率的なサンプリングは行なえないため、以前の調査に基き、男女比と年令層を配慮し、割り当てた、アクシデンタルなサンプルをとった[14]。

後に見るように、単純集計において回答の比率の差が大きいため、アクシデンタルなサンプルでも十分に代用できると考えられる。また、今までこのような神社仏閣への参拝者を対象とするまとまった面接調査は行なわれてこなかったため、調査データとして意義のあるものと思われる。

この調査は、昭和六〇年五月二六日の日曜日に第一回調査として五〇ケースが集められ、さらに質問文を修正して、第二回調査として六月十一日の火曜日と十二日の水曜日に四七ケースを集めた。

質問票には、日本人の宗教意識に関連が深いと考えられる質問が、第一回目の調査では二九項目、第二回目の調査では二五項目含まれている。そして、それぞれに対して、「まったくそう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそうは思わない」、「まったくそうは思わない」という五つの回答をリストで示し、その中から選んで回答してもらうという方法をとったのである。

四、民間信仰における基層信仰の表出

それでは、第一回目の調査で得られた結果の中から、まず信者の多数意見、一般的傾向が明らかに現われているものを幾つか挙げ、そこから基層信仰の要因を探ってみよう。

第一に挙げられる信者の傾向は、当然のことながら、ご利益に対する期待が強いことである。表4の問1に「まったくそう思う」と答えた人が二三人、「どちらかといえばそう思う」と答えた人が一五

表4　第i回調査結果（昭和60年5月26日　ケース数50）

質問文		I	II	III	IV	V	VI
問1	神や仏に願いごとをすれば、なんとなくかなえてくれそうな気がする。	23	15	7	3	2	0
問2	霊の力、超自然的力は恵み深いものです。	16	13	15	3	0	3
問3	人は自分だけで生きているのではないということを自覚し、常に感謝と愛情を忘れてはならない。	48	1	1	0	0	0
問4	何ごともなく生きていることは、天地の恩であるという気がする。	31	9	9	1	0	0
問5	祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる。	28	15	6	1	0	0
問6	人はそれぞれ自分に合った宗教を選んで信仰すればよい。	43	3	1	3	0	0
問7	神も仏も同じようなものである。	26	8	4	5	6	1
問8	家族や知人と一緒に石切さんへお参りすれば、気がはれる。	36	10	3	0	1	0
問9	ご先祖の霊は、ずっとどこかで生きていて我々子孫をいつも見守っていてくれます。	33	7	8	1	1	0
問10	宗教で救われるということは、この世でうまくいくことである。	21	13	6	4	5	1

I　まったくそう思う
II　どちらかといえばそう思う
III　どちらともいえない
IV　どちらかといえばそうは思わない
V　まったくそうは思わない
VI　わからない・無回答

表5　昭和56年NHK「現代日本人の宗教意識」調査

質問文		I	II	III	IV
問1	神や仏に願いごとをすれば、なんとなくかなえてくれそうな気がする。	54.0 55.4	36.5 35.6	8.1 7.4	1.4 1.6
問2	祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる。	58.9 75.5	30.6 16.8	7.8 5.8	2.6 1.9

注）上段は、全体の集計の比率（%）。下段は、40才以上の集計の比率（%）。

I　そう思う
II　そうは思わない
III　どちらともいえない
IV　わからない・無回答

人で、合わせて肯定的に答えた人が八割を超える。また、同じく問2でも、「まったくそう思う」が一六人、「どちらかといえばそう思う」が一三人で半数以上を占め、否定的なのは、「どちらかといえばそうは思わない」人が三人いるだけである。

このようなご利益を期待する心情は、石切神社の信者だけに見られるものではなく、現在も日本人一般に見られるものである。世論調査から例を引けば、表4の問1は、昭和五六年のNHKの世論調査で用いられた質問文と全く同じなのであるが、NHKの調査でも表5の問1『神や仏に願いごとをすれば、なんとなくかなえてくれそうな気がする』という質問に「そう思う」と答えた人が五四・〇%と半数以上を占める。石切神社の参拝者に多い四〇才以上の人々に限ってみれば、五五・四%であり[15]、石切神社に集まる人々ほど高率ではないが、現在の日本人一般に見られる心情と言うことはできるであろう。

そして、このご利益を期待する、いわゆる現世利益は、その概念規定に関しては様々な意見や考えがあるにしても多くの社会において古くから行なわれてきたことに異論はないであろう。日本における古い例を挙げれば、たとえば、『日本書紀』に皇極元年（六四二年）に雨乞いが行なわれたことが記されており、それによるとまず、中国の祭儀を試みたが効果がなく、ついで僧が雨乞いに霊験あらたかな仏説大雲晴雨経を読誦したが、小雨が降っただけであった。最後に天皇が日本に固有の神々に祈ったところ、大雨が降ったという[16]。このように、仏教や儒教伝来当初は、それらによる祈願と日本固有の神々への祈願が併用されていたことが明らかである。したがって、仏教や儒教伝来以前には、日本固有の神々への祈願しかなかったと推測される[17]。

つまり、昔から現在にいたるまで、日本人は、ご利益のために神々に祈願をする信仰心を保持してきたと考えられるのであり、これは仏教や儒教が影響する以前から続く基層信仰の一要因といえるのである。この要因のことを御利益（ゴリヤク）志向と名付ける。

しかし、この御利益志向よりも更に強い意識が石切神社の信者には幾つか見られる。その一つは、感謝の念や天地の恩という意識であり、これらは、信者が初めて参拝したときから定期的に参拝するようになる経過にもよく現われている。多くの信者は、初めは病気を治してもらうために石切さんにお参りするのだが、病気が全快した時にはそれを石切さんのお蔭と感じ、その後はそのお蔭に対してお礼参りを続けていくうちに、次第に日々つつがなく生きていられることへの感謝の念が生じ、いつのまにか、天地神仏あらゆるものに対する恩の意識でもって月参りするようになるのである。

それを調査の結果で見てみると、表4の問3に肯定的に答えた人が四九人で否定者はおらず、また問4に肯定的に答える人も四〇人と八割を占めるのである。

このような恩の思想は、もちろん仏教思想から取り入れられたものである。しかし、原始仏教においては、人間の愛情や秩序を否定し、そこから離脱して静寂な悟りの境地に達する隠遁的、逃避的な面を特徴としており、父母、師、その他あらゆる人に対する愛情や

尊敬は、俗世間に対する愛情＝恩愛として否定的な意味しか持たなかった。したがって、恩が説かれるのは在俗の人々のあいだに限られていたのである[18]。ところが、日本にもたらされた恩の思想は、直接には漢訳仏典によってであり、そこでは、そもそも人が生きているということは、すべての人の恩愛を受けているからであると考えられていた。日本で広まった四恩説は、その恩をかけてくれる人々を挙げたものである。その中で最も有名で、平安朝以降に日本に浸透したのが『大乗本生心地観経』のあげる四恩で、第一に父母の恩、第二に衆生の恩、第三に国王の恩、第四に仏・法・僧の三宝の恩が挙げられている。衆生の恩、国王の恩は、父母の恩をモデルにして初めて理解できるとし、その重要性は認められてはいる。しかし、最も重要なのは三宝の恩であり、山よりも高く海よりも深い報い難き親の恩に報いるということは、親と共に大菩提心を発して人と生まれたことに感謝し、仏法を聞いて信仰を喜ぶことであると解釈されていた[19]。

この四恩の説は、近世庶民においては、たとえば貝原益軒の恩の思想によると、以下のように広まっていた。「人には四恩あり。天地の恩、父母の恩、主君の恩、聖人の恩である[20]。」この中で天地の恩が最も重視されており、これは他の恩と異なり漢訳仏典の主要なものには挙げられていない日本的なもので[21]、基層による変容の働きによって漢訳仏典による恩の思想が最終的にこのような形になったのであると考えられる。つまり、見田宗介が「〈原恩〉の意識」として取り上げたように[22]、何ごともなく生きていられることに対しておかげさまでと感謝する心情であり、その対象は、普通は明確に特定の対象が意識されておらず、神仏一般であり、諸霊であり万物である。したがって、そこにはアニミズム的心情も浸透している。そして、お蔭を感じる対象として最も象徴化され、一般に流布しているものが天地なのである。それゆえに、日本の恩の意識の中で最も基本的なものとして天地の恩があると考え、恩の意識形成過程に大きな影響力を与えてきたこの要因をお蔭信仰と名付ける[23]。

さて、次に挙げられる信者の宗教意識の特徴は、祖先崇拝の意識の高さである。祖先崇拝はもちろん、日本に固有の現象ではないが、伝統的な風習、習俗であることに異論はなかろう。祖先崇拝が基層信仰の一要因であるかどうかを論じる時に問題となる点は、仏教との習合過程による変容や、その存続の状態ではなく、第二次世界大戦後から今日にかけて、「家[24]」と結びついていた祖先崇拝が衰えてしまったことである。しかし、もしそれが基層信仰の一要因であるならば、時代の変化にも関わらず、存続しているはずである。そこで、祖先崇拝の中に現在でも存続している面を探ってみよう。

前田卓は、「家」の先祖を重んじる祖先崇拝を発生、保持させてきた要因を二つ挙げている。まず一つは、「家」の成員間同士の相互了解が言語のいらぬほど具体的、直観的なものとなり、相手の個別的事情に対しては、それによく対応した扱いを生じせしめる実践的情緒、すなわち、「主情性」が起こるのであり、このため、生きているものは死者を容易には忘れることができない。第二には、家父長は家族成員の養育者であり、農耕社会で重要視される知識をもつ文化

的超越者であるため、家族成員から特に崇敬を受けたのである[25]。

ところで、第二の家父長の権威は衰えてきたが、「主情性」のほうはどうであろうか。

ロバート・J・スミスの位牌調査によると、「家」の祖先崇拝という観点からいえば、祀られるべきではないものまで祀られている。そして、当然その家にあってもいい位牌の場合でも変った説明がなされることがある。

私の父は家を逃げ出したんです。それも私達が皆大きくなってからのことです。父は再婚しておりました。でも、私は父が亡くなったと聞くと、この家で父を拝むのに、位牌の写しを作りました。何だかだと言っても、やっぱり父は父ですから[26]。

つまり、現代においても位牌を作り、祀る際に、個人的な情愛という要素が大きな役割を果たしていると考えられる。したがって、祖先の人との心の繋りが重んじられ、それゆえに先祖は、この世の中からあまり遠くない所でいつも我々子孫を見守っており、また心の繋りによって、生きる者と先祖との連続性が認められ、人は死後誰でもホトケ＝ご先祖さまになるという観念が根強く存続しているのであろう。

このように、日本においては主観的な解釈によって祀る対象を選択する傾向があり、これは対象のみに限らず、祀る方法にも見られることである。そこでこの傾向を主観主義と名付けよう。この各自の主観を尊重する主観主義があるので、超越的価値は認められない。したがって、排他的ではなく、新しきものを採用するのに古いものを廃する必要がなく、重層的な構造が生じるのである。

これを調査の結果で示せば、表4の問5に「まったくそう思う」人は二八人、「どちらかといえばそう思う」人は一五人で、合わせて八割以上であり、祖先の人との主観的な繋がりは、保持されていると言える。そしてこのことは、石切神社の信者のみにあてはまることではない。先にも挙げたNHKの世論調査の結果でも、『祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる』という質問（表5問2）に、「そう思う」と答えた人が、五八・九%、石切神社の参拝者に多い四〇才以上の人々に限ってみれば、七五・五%の人が「そう思う」と答えているのである[27]。つまり、祖先崇拝の意識、その中でも主観主義的側面は広く日本人一般が保持する基本的心性の一つであり、それが石切神社の信者にも現れていると言える。

さらに主観主義について補足しよう。もちろん、信仰心は本来主観的なものであるが、一つの教えを学び、その枠内で信仰心を保持していくのが一般的な宗教団体内での信仰といえる。石切神社の場合にも、昭和二三年宗教法人として認可され、単立の神道石切教となると同時に教義・教宣が作られたが、この教義・教宣はその存在すらもほとんどの信者には知られていないし、また御祭神の名称を知る人も全くといっていいほどいない。このことを信者の側からいえば、神社側から信仰の内容を限定されることがなく、自分の欲求に従った自己の信仰心を正しいと信じ、保持していくことができ、さらに言えば、人々は自己の信仰心に合った宗教施設を求めて渡り歩くとも言え、神社側も多様な信仰心を持つ人々を許容することによ

って多数の人々を集めることが可能になっているのである。

調査の結果で示すと、表4の問6に「まったくそう思う」人は四三人と八割以上の高率を占めている。これは、信仰心の正しさは信じる本人の主観によるものであるという主観主義の裏返しが、他人の信仰心が自己と異なってもかまわないという寛容さを生んでいると解釈することができよう。そしてこの主観主義は、一方では典型的な現世利益への欲求となるであろうし、他方ではまた、先に示したように祖先崇拝にも現われる。つまり、ご先祖さまを拝むのと同じ気持で石切神社に参拝する、神と仏＝先祖を区別していない人々が多いことも、友人、知人と連れだってお参りすることに信仰的というよりは、娯楽的な意義を見いだすことも許容するのである。これは、表4の問7、問8のどちらにも肯定的回答が多いことによって裏付けられるのである。

このような主観主義によって支えられる祖先崇拝における祖先観は、たたったりバチがあたったりするよりはむしろ、恵み深い加護的なものと考えられる。柳田國男によると、「我々が先祖の加護を信じ、その自発の恩沢に身を打任せ、特に救われんと欲する悩み苦しみを、表白する必要もないように感じて[28]」「ひたすら神の照鑑を信頼して疑わず、冥助の自然の厚かるべきことを期して[29]」いるのが、先祖に対する加護を求める姿勢である。そしてそれは、「年齢男女から、願いの筋までをくだくだしく述べ立てて、神を揺ぶらんばかりの熱請を凝らす[30]」祈願と大きく異なる、祖先崇拝の特徴なのである。

実際にこのようなご先祖が我々子孫を見守っていてくれるという被護を期待する心情を石切神社の信者に尋ねた表4の問9の結果では、「まったくそう思う」人が三三人、「どちらかといえばそう思う」人が七人と高い割合を示すのである。このような性質を被護性と名付け、基層信仰の一要因であると考える。

最後に挙げられる信者の特徴は、来世よりも現世を重んじる現世主義的態度である。表4の問10に「まったくそう思う」と答えた人が二一人、「どちらかといえばそう思う」と答えた人が一三人で合計すれば七割近くを占める。この現世主義、すなわち重要であり現実的であると考えられるのは、現に生きているこの世であり、あの世を含む他の世界には関心が低く、それゆえに現世の為に宗教的なものが利用されてきたことは、聖徳太子から国家神道まで、善きにつけ悪しきにつけ、日本の歴史上常に見いだすことのできる基本的な特徴である。

先に扱った祖先崇拝から例を挙げれば、祖先崇拝は支配手段として利用されたために存続しえた面もある。というのは、明治から大正にかけて資本主義の発達とともに、すなわち都市に労働者としての人口が集中する頃から、庶子や婦女子が労働者として有用となったため、相対的に家父長の権威は低くなり、祖先崇拝は衰退の兆しを見せていた。ところが、天皇制国家が政治的行政的必要からイデオロギーとして神道を利用したために、国家神道体制の一支柱として、祖先崇拝は敗戦まで延命させられたのである[31]。

また、恩の思想から現世主義的側面を挙げてみることも容易であ

る。平安時代以降に広まった『大乗本生心地観経』による四恩の説は、三宝の恩を最重要としていたのに対し、たとえば無住の『雑談集』（一三〇五年作）においては、四恩の中で最も重要なものは父母の恩であるとし、父母の恩を知らねば三宝の恩も知ることはできないと述べられているように、考え方が逆転する。そして、父母の恩は現世の恩であり、これを知る時現世安穏が得られ、また、父母の恩が国王その他の恩の根底にある限りにおいて、それらの恩に報じることも現世安穏と関わってくるのである。ここに宗教的色彩の軽視、そして現世重視の態度が読み取れる(32)。

以上のように石切神社の信者には日本の基層信仰の要因であると理論的に考えられるもの、すなわち、御利益志向、お蔭信仰、主観主義、被護性、現世主義の五要因が現われているのである。

五、因子分析の結果

日本の宗教を論じた研究においては、前節で挙げた基層信仰の要因と同じようなものが日本の宗教の特徴として挙げられてきた。しかし、実際に調査し、その結果から述べているもの自体が少なく、そしてそれらもほとんどが事例研究である。

そこで第一回の調査の質問文に修正を加え、二五項目の宗教意識を問う質問票を作成し、昭和六〇年六月一一日、一二日に調査を行ない、集めた四七ケースを因子分析した。ケース数が四七と少なく、本来事例研究に属するものではあるが、今まで述べてきた宗教意識の多数意見及び一般的な特徴については、二回の調査で大体一致しており、それゆえにケース数を一〇〇、二〇〇と増しても同じような結果が得られると考えられる。したがって、大標本と同じように因子分析し、石切神社の信者の宗教意識の構造を考えていくことも、現状の少ない調査研究を鑑みれば、十分に有効な方法であると言える。

分析方法は、まずいわゆる主成分分析(33)を行ない、そこで得られた五因子、すなわち、「諸霊信仰」、「此岸志向」、「呪術志向」、「主観主義的信仰心」、「祖先崇拝」と名付けられた五因子までの因子構造を仮説とし、ＭＩＬＳ(34)を用いて確証的因子分析を行なうという手順をとった。

確証的因子分析は、従来使われてきた説明的因子分析とはいくつかの点で異なるが(35)、最も大きな違いは、確証的因子分析が統計的推定を考慮にいれていることである。つまり、説明的因子分析は、理論的仮説なしにとりあえず集めたデータを因子分析にかけ、結果をみて事後解釈するものであるため、因子数の決定や軸の回転に明確な基準がなく、常に問題となってきた。それに対して確証的因子分析においては、理論的な仮説を持ち、その仮説とデータの適合度を調べることによって、よりよいモデルを確証できるという利点をもつものである。

確証的因子分析の解法は幾つか考えられているが、今回は標本値に対する尤度を最大とするような母集団の値を推定する、いわゆる最尤推定法を用いた。

表6　概念と指標の関連

Ⅰ諸霊信仰	1.323	問4　石切さんへお参りし、お百度をふんだり、加持祈禱をすれば病気は必ずよくなる。	e
	1.088	問22　石切さんに参ることは、精神修養よりもご利益である。	e
	.736	問21　人はだれでも、死んだら神様になる。	e
	.724	問18　石切さんにまいり、鳥居の前にたつと、神の霊気を感じる。	e
	.712	問15　霊の力、超自然的力は恵み深いものです。	e
	.621	問6　石切さんへのお参りを欠かすと、何となく不安である。	e
	.561	問3　霊の力、超自然的力は恐ろしいものです。	e
	.523	問19　神や仏に願いごとをすれば、なんとなくかなえてくれそうな気がする。	e
	−.429	問2　お宮参りや七五三参りは単なる慣習である。	e
	.427	問20　いのるということは、お百度、加持祈禱より大事である。	e
	.324	問23　昔の人は山や川、井戸やかまどにいたるまで、多くのものに神の存在を感じたり、神をまつったりしてきましたが、こうした気持ちがよくわかるような気がする。	e
	.296	問1　先祖の霊は、ずっとどこかで生きていて我々子孫をいつも見守っていてくれます。	e
Ⅱ此岸志向	1.095	問16　この世界を支配しているのは、神仏ではなく人間である。	e
	.890	問22　石切さんに参ることは、精神修養よりもご利益である。	e
	.764	問17　家が栄えるのは生きているものの努力であって、ご先祖のおかげではない。	e
	.462	問12　神様といっても仏様といっても同じである。	e
	.396	問11　何ごともなく生きていることは、まわりの人のおかげではなく、天地の恩である。	e
	.292	問17　この世の幸せの方が、来世の救いより大切です。	e
Ⅲ呪術志向	1.313	問4　石切さんへお参りし、お百度をふんだり、加持祈禱をすれば病気は必ずよくなる。	e
	−.775	問12　神様といっても仏様といっても同じである。	e
	.471	問7　この世の幸せの方が、来世の救いより大切です。	e
	.320	問6　石切さんへのお参りを欠かすと、何となく不安である。	e
	.190	問25　おまつりやご供養をしないと、神仏や先祖はバチをあてたりたたったりします。	e
Ⅳ主観主義的信仰心	1.115	問9　信仰心を持っていれば、石切さんの教えを全く知らなくともよい。	e
	.432	問10　家族や友人と連れだってお参りすることは、楽しみである。	e
	.364	問14　祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる。	e
	.301	問24　お参りはリクレーションである。	e
	.073	問13　迷っているときは、易者さんやおみくじにたよる。	e
Ⅴ祖先崇拝	−.866	問22　石切さんに参ることは、精神修養よりもご利益である。	e
	.649	問3　霊の力、超自然的力は恐ろしいものです。	e
	.528	問5　人はだれでも、死んだら仏様になる。	e
	−.380	問9　信仰心を持っていれば、石切さんの教えを全く知らなくともよい。	e
	.379	問8　先祖を供養しない人は、信仰のない証拠です。	e

注）数値は標準化されていない。

その結果を表6により見てみよう。左はしは概念、まん中が指標、すなわち質問文、右はしは誤差項であり、数値は概念と指標の関連を示しているが、この数値は非標準化解である。

まず第Ⅰの概念は、すべて来世観を含むいわゆる宗教的なものを測定する指標によって構成されている。中でも特にお蔭を感じる対象である諸霊、超越的力の存在に触れた指標との関連が強いので、この概念は確かに「諸霊信仰」の特徴を示していると考えられる。霊の存在に関する問18、23、霊の力、超自然的力、神に対する一種の親近感である問21、15、逆に恐れである問6、3などとの関連が強い。ご利益を期待する問4、22が特に強いが、これらは単なるご利期待ではなく、ご利益をもたらす諸霊の存在、霊の力、超自然的力を認め、それらを信じ、頼ろうとする観念を背景にしたものであると解釈することができる。

第Ⅱの概念は、第Ⅰの概念とは逆に此岸中心の考え方を測定する指標から成り立つ「此岸志向」であることを示している。問16、17には、霊的なものよりも人間、彼岸よりも此岸の優位が現われている。したがって、問22のようにご利益への期待が典型的に現われているが、問11のようにご利益を恩、すなわちお蔭と感じる心情とも深く結びついており、このお蔭信仰が神仏への信仰心を生む基になっていると考えられる。

第Ⅲの概念は、「呪術志向」であり、現世利益の中の、特にご利益を求める心情と相関が高いことが確証されている。このような心情を持つ人々は、問7に示されているように、来世でよりもまずこの世の幸せを願い、そのため問4にあるお百度、加持祈禱の、石切神社の信者が病気治しのために実践する、呪術的手段に頼ろうとするのである。したがってご利益をもたらす神仏観もかなり具体的に考えられている筈であり、問12の指標とは負の相関が高くなるのである。

第Ⅳの概念は、「主観主義的信仰心」であり、問9に示されているように石切さんの教えに限定されず、各個人が自由に保持する信仰心を正しいと認める考え方が現われている。そしてその中では、問14のような祖先の人々との心の繋りを重んじる心性を表出することのみならず、問10のような家族や友人と連れだって参拝したり、問24のリクレーションを兼ねて参拝するような娯楽的側面も容認されるのである。

第Ⅴの概念は、先祖に関して測定する指標と関連が強い「祖先崇拝」の概念である。問8のように先祖の供養を重視する指標、問5の人は死後、仏さま＝ご先祖さまになるという祖先崇拝の「主情性」の一面を示す指標と関連が強い。またこの概念は、問22にみられるようにご利益を明確に期待する心情とは負の相関が強いので、祈願的心情とは最も縁遠く、祖先崇拝に近いことを示している。したがって、この概念を祖先を供養し、敬う「祖先崇拝」の概念と考えられることが確証されたのである(36)。

次に示すべきことは、以上五つの概念間の相関関係である。表7の相関係数を見れば、まず第一に、「諸霊信仰」と「呪術志向」の間に高い負の相関が見られることに気付く。そして、「呪術志向」は、

表7　概念間の相関

	諸霊信仰	此岸志向	呪術志向	主観主義的信仰心	祖先崇拝
諸霊信仰	*				
此岸志向	−.4039	*			
呪術志向	−.7683	.3796	*		
主観主義的信仰心	.4179	.0173	−.4615	*	
祖先崇拝	.3478	.3153	−.2148	.0517	*

注）数値は相関係数

「此岸志向」とは正の相関があり、他の「主観主義的信仰心」や「祖先崇拝」とも負の相関が見られる。その「呪術志向」と唯一正の相関にある「此岸志向」も、「諸霊信仰」とは負の相関があり、他の「主観主義的信仰心」と「祖先崇拝」とは正ではあるが、どちらかといえば低い相関になっていることがわかる。したがって、「此岸志向」と「呪術志向」は、相関の強い概念であると考えることができる。

そこで、この両者を合わせて、「現世主義的信仰心」と名付けよう。そこでは、現世を中心と考え、この世でのご利益を期待し実現させるために呪術に頼る信仰心なのである。

一方、「諸霊信仰」は、「主観主義的信仰心」と「祖先崇拝」とに強い相関がみられる。そこで、この三つを合わせて「汎神論的信仰心」と名付けよう。これは、あらゆるものに霊の存在を感じ、諸霊の力を認める信仰心であり、祖先崇拝も含まれるのはもちろん、主観主義的信仰心が、それの成り立つ基盤であるといえる。

以上のことから次の三点が結論として挙げられる。まず第一に、石切神社の信者には、「汎神論的信仰心」と「現世主義的信仰心」の二つが明確に現われていると言うことができ、これらは、前節で考察した基層信仰の五つの要因が結びついたものである。第二に、基層信仰の五要因は、理論的には分離して論ぜられるが、一民間信仰である石切神社の信者においては、実際には明確に分離せずに現われている。そして第三に、二つの基層信仰の要因の働きのうち、「現世主義的信仰心」によって現世利益を求める人々が石切神社に集まるのであり、「汎神論的信仰心」によって、人々は定期的に参拝する

ようになると考えられる。

最後にこのモデルの適合度を示しておく。その指標の一つとしてχ^2÷自由度があるが、それは、χ^2＝四五六・三、自由度二五二でモデルの適合度は一・六九となり、かなりよいことを示している。したがって、確証的因子分析によってモデルの正しさが高められたと言えるのである。

おわりに

宗教を捉えるための研究は、欧米においては一元的な定義、尺度から、多元的な尺度の構成を目指して進んできた。しかし、そこで捉えられている宗教はおもにキリスト教であった。

たとえば、その先駆的業績であるグロックの五次元説[37]においては、イデオロギー的次元が他の次元と最も相関が高く[38]、また、後にはこのイデオロギー的次元は三つに分割されるように[39]、キリスト教についての信念が、最も重要な次元とされているのである。

因子分析を用いた研究においても、同じことが見てとれる。

キングとハントによる因子分析は、数度にわたって繰り返されている貴重な研究ではあるが、そこに挙げられている因子には、キリスト教の教えに対する心服（Creedal Assent）、敬虔主義（Devotionalism）、教会への出席（Church Attendance）、教会活動（Organizational Activity）、献金（Financial Support）などが、含まれている[40]。また、心理学的側面をも含む、メドウの研究でも、キリスト教的神（Christian God）、神的一元論（Sacred Monism）、信念の厳格性（Belief Rigidity）、伝統主義（Church Traditionalism）の因子などが抽出されているのである[41]。

このような欧米の研究をキリスト教の伝統がない日本に当てはめることは不可能である。そして、残念なことに日本独自の宗教性の次元に関わる研究も非常に少ない。しかしその少ない中に、日本の宗教の中で最も合理化されていると言われる浄土真宗の信者の宗教意識を因子分析したものがある[42]。そしてそこでは、民族宗教の因子が抽出されており、この因子は、物質的現世利益、祖先崇拝、氏神信仰の三側面、つまり、基層信仰の要因であると考えられているものから構成されているが、それ以上の分離はなされていないのである。

要するに、組織的宗教にも基層信仰の要因が見られることはまちがいないが、実際の調査研究においては、理論的に考えられているものほど、明確に、様々に分化してはいないのである。

本稿においては、基層信仰の表出しやすい民間信仰を確証的因子分析することによって、分離しにくい基層信仰の中から「汎神論的信仰心」と「現世主義的信仰心」の二要因を挙げたのではあるが、その適切さを比較検討できる研究が皆無の状況である。したがって、今後、他の対象においても同様の、また更に精密な宗教意識の調査が望まれるのである。

注

(1)桜井徳太郎『日本民間信仰論増補版』一九七三年、弘文堂、3—10頁。
(2)藤井正雄「基層としての民間信仰」桜井徳太郎編『日本民俗学講座3　信仰伝承』所収、一九七六年、浅倉書店、5頁。
(3)桜井前掲書、6頁。なお、民間信仰の特徴を持ちながら、信仰圏だけは広範囲にわたる例が幾つか見られるので、信仰圏の広さには注意を要する。
(4)たとえば、島園進「カリスマの変容と至高者神話——初期新宗教の発生を手がかりとして——」中牧弘允編『神々の相克』所収、一九八二年、新泉社、51—77頁参照。
(5)和辻哲郎『續日本精神史研究』一九三五年、岩波書店、60頁。
(6)丸山真男「原型・古層・執拗低音」武田清子編『日本文化のかくれた形』所収、一九八四年、岩波書店、87—152頁参照。
(7)同『日本の思想』一九六一年、岩波書店、5頁。
(8)同「原型・古層・執拗低音」143頁。
(9)中村元『東洋人の思惟方法　3』一九六二年、春秋社、32頁。
(10)同書、35頁。
(11)同書、11頁。
(12)石切神社の詳しい紹介とこの調査の結果については、森下伸也「デンボの神様」宗教社会学の会編『生駒の神々』所収、一九八四年、創元社、103—137頁を参照。
(13)この調査は宗教社会学の会による生駒宗教調査の一部である。
(14)割り当てた男女比は、一対二、年齢層は、六〇才以上が六割、六〇才未満が、四割である。その結果を男、女、六〇才以上、六〇才未満の順で示すと、第一回調査では、二〇、三〇、三一、一九、第二回調査では、一二、三五、二二、二三、年齢の不明者が二名であった。
(15)NHK放送世論調査所編『日本人の宗教意識』一九八四年、日本放送出版協会、基本属性別集計結果表、76頁。
(16)藤井正雄「現世利益」田丸・村岡・宮田編『儀礼の構造』所収、一九七二年、佼成出版、187頁。
(17)木内央「平安佛教と現世利益」日本佛教研究会編『日本宗教の現世利益』所収、一九七〇年、大蔵出版、55—56頁。
(18)鈴木宗憲『日本の近代化と恩の思想』一九六四年、法律文化社、16頁。中村元「「恩」の思想」仏教思想研究会編『仏教思想4　恩』所収、一九七九年、平楽寺書店、25頁。
(19)鈴木前掲書、46—66頁参照。
(20)貝原益軒「大和俗訓」松田道雄編『日本の名著14　貝原益軒』所収、一九六九年、中央公論社、143頁。
(21)『知覚禅師自行録』と『釈師要覧』の四恩は、師長、父母、国王、施主であり、『四分律行事鈔資時記』では、国王、父母、師僧、檀越、『諸乗法数』では、国王、父母、師友、檀越と諸仏、国王、父母、施者の二種類である。いずれの仏典にも天地の恩は、挙げられていない。
岡部和雄「四恩説の成立」仏教思想研究会編前掲書所収、183—184頁。
(22)見田宗介『新版現代日本の精神構造』一九八四年、弘文堂、155—157頁参照。
(23)日本においては、このお蔭信仰と対になるものとして普通、タタリが挙げられるが、石切神社の信者においては、タタリの意識は非常に低い。タタリについては他の対象で調べ検討する必要があろう。
(24)「家」の概念は森岡清美によった。森岡清美『家の変貌と先祖の祭』一九八四年、日本基督教団出版局、38頁。
(25)前田卓『先祖崇拝の研究』一九六五年、青山書院、第二章参照。
(26)ロバート・J・スミス『現代日本の先祖崇拝（下）』前山隆訳、一九八三年、御茶の水書房、286頁。
(27)NHK放送世論調査所編前掲書、82頁。
(28)柳田國男「先祖の話」『新編柳田國男集　第五巻』所収、一九七九年、筑摩書房、346頁。
(29)同書、347頁。
(30)同書、346—347頁。
(31)前田卓前掲書、第四章参照。
(32)石田瑞麿「日本文学に現われた恩の思想」仏教思想研究会編前掲書所収、201頁。
(33)因子分析については以下の著作を参考とした。

A・L・コムリー『因子分析入門』芝祐順訳、一九七九年、サイエンス社。芝祐順『因子分析法第二版』一九七九年、東京大学出版会。

(34) MILS プログラムについては、

Schoenberg, R., *MILS : A Computer Program to Estimate the Parameters of Multiple Indicator Linear Structural Models*, 1981, Bethesda, National Institutes of Health, unpublished. を参照。

(35) 確証的因子分析については以下の著作を参照。

Evaritt, B.S., *An Introduction to Latent Variable Models*, 1984, Chapman & Hall.

Long, J.S., *Confirmatory Factor Analysis : A Preface to LISREL*, 1983, Sage publications.

芝前掲書、第一一章。

(36) 問8の先祖の供養を重視する指標や問5の死後は仏さまになるという指標は、先祖崇拝の概念との関連を示す数値が他の指標と比べて低いが、これは、この概念において先祖崇拝があまり重要でないことを示すのではなく、全員が広く保持する心情であるために明確に現われてこないのだと考えられる。

(37) Glock, C.Y., and Stark, R., *Religion and Society in Tension*, 1965, Chicago : Rand McNally, Ch. 2.

(38) Glock, C.Y.,and Stark, R., *American Piety*, 1968, Berkeley : University of California Press, Ch. 9.

(39) *Ibid.*, Ch. 3.

(40) King, M.B., Measuring the Religious Variables : Nine Proposed Dimensions, *Journal for the Scientific Study of Religion*, 1967, Vol.6, pp. 173—190.

King, M.B.,and Hunt, R.A., Measuring the Religious Variables : Amended Findings, *Journal for the Scientific Study of Religion*, 1969, Vol.8, pp. 321—323.

(41) Meadow, M.J.,and Kahoe, R.D., *Psychology of Religion*, 1984, Harper & Row, Ch. 21.

(42) 金児暁嗣「宗教組織と信仰の機能（Ⅳ）」『大阪市立大学文学部紀要　人文研究』一九八三年、第34巻、30—58頁。